

## 由布院温泉における芸術文化観光空間の形成と構造

別府大学短期大学部講師 小堀 貴亮

### I. はじめに

#### (1)研究の目的

大分県由布院温泉（以下、由布院と略す）は、その恵まれた泉質や効能、湧出量、そして何よりも美しい自然景観などによって、わが国において最も人気がある温泉観光地である。現在こそ、日本中から年間およそ 380 万人の観光客が訪れ、うち宿泊客数は 90 万人に昇るわけであるが、昔は近接して日本一の温泉観光都市・別府があることから、常にその地位は相対的に低次段階にとどまっておき、「別府の後背地」というイメージが植え付けられていた。事実、由布院が著名になる前には、「奥別府・由布院温泉」などと称されてきたのである。現在の由布院は、他の著名観光地において往々にして存在する歓楽地的イメージがみられず、むしろ純粋な「健康と保養の温泉地」というイメージが広く浸透している。その著しい発達過程において、観光をとりまく社会経済的動向に対して住民が主体となって真摯に努力を続け、その結果がこのような観光景観に現れているのである。山村<sup>1)</sup>によると、近年における国民の温泉に対する志向性が保養・療養にますます傾注しつつあることが指摘されているが、由布院は、まさにこうした時代のニーズに非常に適した観光空間であることが認められよう。

また由布院にとって、温泉資源や自然景観とともに、最も重要な要素の一つとなっているのが、地域内に数多く点在している美術館やギャラリーなどの芸術文化観光施設である。単なる温泉観光地にとどまらず、今や由布院は日本でも有数の「アートの町」としても知られるようになった。

このような由布院の観光に関する先行研究は、主として温泉観光地としての論考が幾つか発表されている<sup>2)3)4)5)</sup>。しかし、「アート」という側面から捉えた論考は、それ自体の発達史がまだ新しくあまりみられない。そこで、本稿では、温泉観光地・由布院のもう一方の側面を「芸術文化観光空間」として捉え、その形成過程および地域構造について明らかにすることを目的として論述したい。

1) 山村順次 (1999) : 『新版日本の温泉地—その発達・現状とあり方—』。日本温泉協会、134~135 頁。

2) 山村順次 (1981) : 保養温泉地としての大分県由布院温泉。温泉 49(2)、22~25 頁。

3) 猪爪範子 (1992) : 湯布院町における観光地形成の過程と展望。造園雑誌 55(5)、367~372 頁。

4) 浦 達雄 (1997) : 由布院温泉の観光診断。日本観光学会誌 30、71~76 頁。

5) 浦 達雄 (2000) : 湯布院温泉における小規模旅館の経営動向。大阪明浄大学紀要開学記念特別号、9~16 頁。

## (2) 研究対象地域の概要

湯布院町は、由布院、湯平、塚原の 3 つの温泉地から成り立っている。九州横断道路で結ばれている別府へは 26km、阿蘇へは 88km の距離にあり、広域観光ルート形成上の一大拠点となっている（図 1）。

町の中心部は標高 1,583m の由布岳を最高峰とする山々に囲まれた盆地で、東西 12km、南北 8km の一帯には 700 以上の源泉があり、毎分 40kl の湯が湧出している。

全町面積は 12,793ha におよび、多くが山林原野で占められている。急激な観光地開発が行われた結果、都市化進行が危惧されたものの、全体としては農山村的土地利用形態が維持されている。人口と世帯数については、1995 年現在で 11,521 人、4,037 世帯である。総人口については停滞し、世帯数は逆に増加していることに特徴付けられる。産業構造は、脱農林業、サービス産業化に傾斜している。また、伝統的基幹産業であった農林業は観光産業に半ばもたれかかっており、基本的に第二種兼業農家が主である。実態としては、いわゆる「稼ぐ農業」ではなく、家庭菜園や自家消費分といった極個人的生産が圧倒的であり、近年では地価高騰に便乗した売り急ぎが顕著にみられるという<sup>6)</sup>。

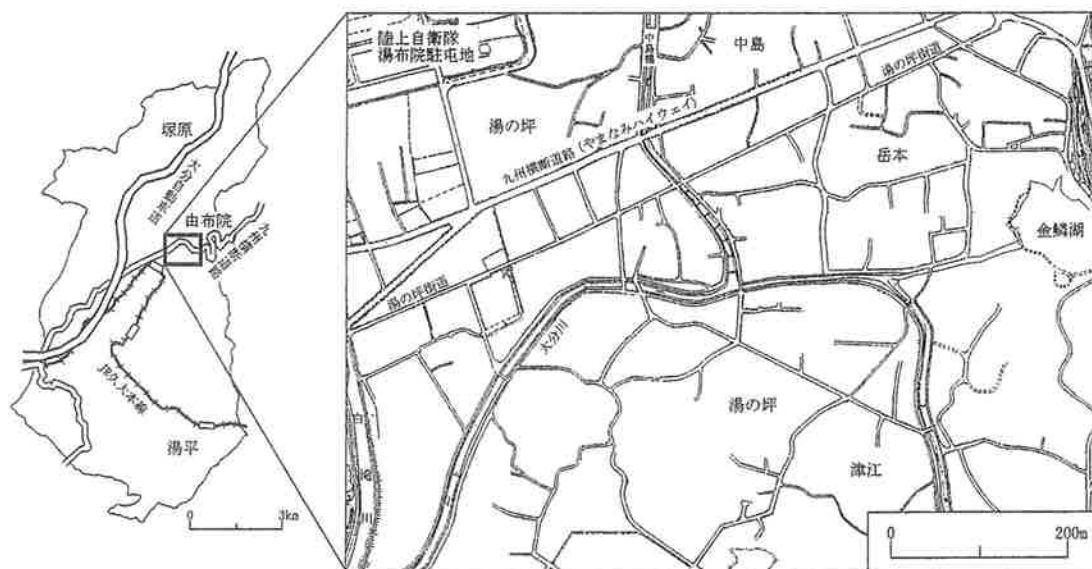


図 1 研究対象地域の概要

湯布院町におけるまちづくりは、中心地区が由布院盆地にあり、主としてこの地区の住民が主導的立場にあったことから、多くが旧由布院地区で起こってきた。従って、町名と

<sup>6)</sup> 前掲 3)、367～368 頁。

しての湯布院と、山や盆地や温泉地などの固有名詞で使われている由布院は、どちらも頻繁に用いられており、世間では混同することが多い。そもそも「湯布院」という町名は、1955年2月に由布院町と湯平村が合併する際に、両地名から文字を取って「湯布院町」となったわけであるが、現在もなお、平安時代から連綿と継承されてきた由緒ある呼称の「由布院」は、由布院温泉や由布院盆地・由布院駅など町内観光空間の要所要所において用いられている。故に、観光地としての「ゆふいん」をイメージする際、多くの人が旧地名である「由布院」を想像するという。本稿においても、行政単位としては湯布院町を用いるが、研究対象地区を旧由布院地区に設定し、基本的には「由布院」を用いることにする。

## Ⅱ. 由布院における観光開発史

由布院における観光開発史は、様々な形でまとめられており、時代をさかのぼれば明治時代までたどりつくが、ここでは由布院が本格的に保養温泉地として発展する契機となった1959年の国民保養温泉地指定から、主として行政による観光開発を中心に述べていくことにする(表1)。

1955年、即ち合併当時の由布院は、交通不便もありひなびた温泉地そのものであった。旅館も田中市や湯の坪に数軒ある程度で、別府の繁栄にあやかり、「奥別府」の呼称で誘客を図っていた。しかし、当時の町長は、「別府志向では永久に奥別府の域を脱することはできない。豊かな大自然と広範な生活空間をもつ由布院をミニ別府にしてはならない。由布院は別府とは異質の健康で明るい温泉地づくりに徹するべきである。」という主張を唱え、厚生省に働きかけ、1959年4月、湯平温泉・塚原温泉も含めて九州で2番目の国民保養温泉地指定を取りつけたのである<sup>7)</sup>。

さらに、1964年に九州横断道路が全線開通し、由布院の地域構造を決定的に改変させることとなった。交通不便な大分のチベットなどと呼ばれてきた由布院が、この観光道路によって、一躍全国的に注目をあびることになる。通称「やまなみハイウェイ」は、別府から阿蘇登山口にかけて大きく迂回していた、従来の国道57号のバイパス的役割をしながら、飯田高原や瀬の本高原などの新しい観光地を引き立てる役割を果たすことになった<sup>8)</sup>。

こうしたやまなみハイウェイの開通を契機に、由布院には観光客はもとより不動産業者や開発業者など、様々な思惑をもった外部の人々の進出を引き起こすことになった。一方で、行政主導型のまちづくりに不安を感じる若手住民の中から、新しい独自の活動が始まるようになる。やがて由布院を支えることになる住民主導型のまちづくりに向けて、地元実力者が登場してきたのもこの時期である。

そして、1966年に、由布院温泉は全日本観光100選に選ばれる。すると急増する観光客

<sup>7)</sup> 湯布院町(1989)：『町誌湯布院』。湯布院町、744～745頁。

<sup>8)</sup> 前掲3)、369頁。

表1 由布院における観光開発史

年	内 容
1959年 (昭和34年)	湯布院町全域が「国民保養温泉地」に指定。
1962年 (昭和37年)	「厚生年金湯布院病院」開院。
1963年 (昭和38年)	阿蘇国立公園編入。町営国民宿舎「由布山荘」開業。
1964年 (昭和39年)	九州横断道路(やまなみハイウェイ)開通。県立「青年の家」開設。
1965年 (昭和40年)	観光客激増。
1966年 (昭和41年)	全日本観光百選に入選。地元青年「5人の会」結成。
1968年 (昭和43年)	日本体育協会「青年スポーツセンター」完成。 「5人の会」が「10人の会」になる。 「10人の会」が由布院名物にイノシシ料理を考案。
1969年 (昭和44年)	岩男町長「西ドイツの保養温泉地」視察。
1970年 (昭和45年)	観光協会が蜚の養育に取り組む。 湯布院ハイツ(簡易保険保養センター)開業。 「猪の瀬戸ゴルフ場」建設問題。 「10人の会」を主体に猪の瀬戸の動きが始まる。 大企業の保養所が建ち始める。 「由布院自然を守る会」発足。 第1回文化芸能大会を開く。
1971年 (昭和46年)	町有原野を東急へ売却。 「明日の由布院を考える会」発足。
1972年 (昭和47年)	統一案内標識のデザイン一般公募。 「牛一頭牧場運動開始」開始。「自然環境保護条例」制定。 「明日の由布院を考える会」新生活運動協会より全国表彰。
1973年 (昭和48年)	「おとぎ野サファリパーク」誘致問題。サファリパーク計画、安心院町に移る。
1974年 (昭和49年)	「清水町長」誕生。「最も住みやすい町こそ優れた観光地である」 由布院温泉旅館組合が自衛隊移駐反対決議。
1975年 (昭和50年)	「第1回牛喰い絶叫大会」開催。「辻馬車」運行開始。「第1回ゆふいん音楽祭」開催。
1976年 (昭和51年)	シンポジウム「この町に子供は残るか」開催。 町総合開発計画を受注。 「第1回ゆふいん映画祭」開催。
1977年 (昭和52年)	特別用途地域「観光・レク地区」指定。
1978年 (昭和53年)	クアオルト構想の実現に向けて、清水町長を団長に「西ドイツ視察団」出発。 町クアハウス構想計画を受注。
1979年 (昭和54年)	「九州湯布院民芸村」開業。「源流太鼓」復活。「平松県政」スタート。 町営SLホテル開設。
1981年 (昭和56年)	環境庁「国民保健温泉地」指定。
1983年 (昭和58年)	「第1回自治大臣賞」受賞(自然や歴史などと調和した個性的な町づくりに取り組んだ成果)。 「サントリー地域文化賞」受賞。 「モーテル類似施設等建設規制条例」制定。
1984年 (昭和59年)	「大型観光ビル」建設反対運動。「コミュニティマート事業」開始(中小企業庁)。 「住環境保全条例」制定。
1985年 (昭和60年)	「環境デザイン会議」設置。「クアオルト構想推進委員会」発足。
1986年 (昭和61年)	「吉村町長」誕生。「第1回農村アメニティコンクール最優秀賞」受賞。 「由布院空想の森美術館」開業。
1988年 (昭和63年)	「潤いの町・人づくり基金条例」制定(自然環境保護条例、住環境保全条例を一新)。 「リゾート開発ブーム」。「リゾートマンション」、「分譲別荘」計画。 「温泉保養館」完成。
1989年 (平成元年)	「ふるさと創生事業」実施。「川いきいき水いきいき事業」着手。 「ゆふいん水と緑のふれあい基金」設置。 「ふるさとの川環境会議」発足。 「人づくり基金」設置。「農村アメニティ村事業」実施。 特急「ゆふいんの森号」運行開始。大分自動車道「由布院～別府間」開通。 「県沿道景観保全地区」に指定。
1990年 (平成2年)	「潤いのある町づくり条例」制定。「ゆふいん健康温泉館(クアージュゆふいん)」開業。 「由布院駅舎」完成。
1991年 (平成3年)	「湯布院町総合計画」策定。「人材育成ゆふいん財団」発足。
1994年 (平成6年)	九州横断道路(やまなみハイウェイ)「阿蘇～別府間」無料化。
1995年 (平成7年)	山水館「ゆふいん麦酒館」開業(地ビール)
1996年 (平成8年)	大分自動車道「福岡～大分間」全通。「ゆふいん健康温泉館」町営化。
1997年 (平成9年)	「湯布院ハーベストファーム」開業。
1998年 (平成10年)	「第1回ゆふいん文化・記録映画祭」開催。

(注) 由布院温泉観光協会(1979)、猪爪(1992)、浦(1999)などにより作成。

に対応すべく、若手旅館経営者たちによって行動しながら勉強会をするという「5人の会」が結成される。さらに2年後には、それが「10人の会」となる。ここでは各旅館の名物料理を共同で開発するなどして地域の「のれん」づくりが手懸けられた。1970年以降は、強力な行政力によって、日本体育協会の青少年スポーツセンター、小中学校校舎の鉄筋化、農地整備などの公共事業が積極的に行われた。しかし、こうした地元主導による積極的な地域づくりの陰で、外部資本による周辺山林や牧野での土地買占めが確実に進行していた。そして盆地周辺の山野に民間の大型施設建設が相次ぐこととなった<sup>9)</sup>。やがて、このような開発行為に危機感を抱く住民によって、反対運動や開発阻止の行動がこの時期に多発するようになる。一方では、当時の一億総旅行者時代といわれた時代の風潮を反映して、由布院への入込観光客も100万人を突破した。地元住民の有志を結集した開発阻止の運動が外部に広まっていき、一時は年間観光客数が200万人に迫ったこともあったという。

また、民間サイドでは1970年に「由布院の自然を守る会」が発足し、翌年、広範な町づくりに取り組む「明日の由布院を考える会」に転進する。さらに1972年、由布院の原風景である牧野を乱開発から守るために畜産の振興を唱えた「牛一頭牧場主運動」が始まり、統一案内標識設置や、風景を見ながらゆっくり散策できる辻馬車運行が始まる。そして「明日の由布院を考える会」の主要メンバーである若手観光旅館経営者たちによって、温泉地活性化への方策が次々に打ち出され、外部への画期的な啓蒙活動が進行した。ここに「明日の由布院を考える会」によって、新たな由布院の開拓が始まったのである<sup>10)</sup>。

一方ではこの時期、地域構造の一極集中是正論や、「地方の時代」、「村おこし」、「一村一品運動」などが盛んに提起されるようになる。湯布院町における取り組みは有数の先進事例として評価されていた。そして1976年に、湯布院町で開かれた「明日の由布院を考える会」と東京在住の地域開発関係の専門家集団によるシンポジウム「この町に子どもは残るか」の開催によって、それまでの様々な活動がはじめて「町づくり」として認識されることとなった。その翌年には、湯布院町を舞台に村おこし運動が提起され、間もなく全国的に拡大するに至ったのである。

しかし、単なる温泉観光地ではなく、住民自らが積極的に町づくりに携わっている湯布院町ということが全国的に知られ、商業資本の進出が相次いだ。例えば、買い占められたままになっていた原野に別荘分譲地が造成されたり、量販店などの物販施設や、民芸村に代表される観光施設の進出もこの時期であった。この段階では、単なる農山村でしかなかった湯布院に多様な都市機能が加わり、暮らしの利便性や快適性が増進したと、好意的に迎える雰囲気も一部にあったという。

このような中、外部の評価はますます高まり、1983年に湯布院町役場は「潤いのあるまちづくり」で自治大臣賞を受け、民間のグループもサントリー地域文化賞など幾つかの賞

<sup>9)</sup> 前掲3)、369～370頁。

<sup>10)</sup> 前掲3)、371頁。

を得た。さらに九州横断高速道路ができたことによってますますの地価高騰をみるのである。

やがて、由布院盆地の商業地区に、8階建ての大型会員制分譲マンション建設の話が持ち上がる。すると、景観破壊や地下工事による温泉脈の分断などを理由にした建設反対派と、中心地区の活性化を理由にした建設賛成派という対立関係が生じた。これに対してあくまで中立的立場を固執していた行政であるが、やがて県の助言と介入によって、階高や規模の縮小を打ち出し、企業との調整にあたることになった。この問題を契機に、1984年「住環境保全条例」が制定されるが、この時既に農・住・商・観の土地利用が混在しておりスプロール的な観光地化が進行しつつあったのである。

そして、1987年に「総合保養地域整備法」が施行される。すると、首都圏で特に顕著であったリゾート開発が、湯布院町のような遠隔地にまで瞬く間に及ぶこととなった。この間、保養温泉地のシンボル施設である、温泉保養館が土地信託方式で完成した。また、中心商店街では、商工会主導でコミュニティマート構想が導入され、商業空間としてもより機能充実が図られた<sup>11)</sup>。このような80年代末のリゾート開発の中で、観光としては年間宿泊客70万人を越え、入り込み客数300万人を突破するという急発展をなし遂げた。一方、基幹産業である農業は、斜陽化が顕著なところをさらにリゾート開発資本に狙い打ちされ、次々に身売りされていったという。

このような事態の中、1990年8月「湯布院町・うるおいのある町づくり条例」が成立した。この条例は開発を悪とするのではなく、よりよき成長を助長するという、「成長の管理」を基本理念としているところに特色がみられる。条例制定の素案作成から成立に至るまでの期間がわずかに3ヶ月という異例のスピード制定であったという。このことから次々と買い占められていく土地、相次ぐ開発申請、建設などをめぐるトラブル、世論の批判などの対応を苦慮していた行政の立場が如実にかがえよう。この条例の主な内容は、①起業者は、事業計画を住民に対し30日間公表する義務を負うこと、②建物の高さを、第一種住居専用地域では10m以下（実質2階建て）に制限、近隣商業地域や商業地域内でも15m以下（5階建て以下）に制限すること、③建蔽率を制限し、空き地を確保し、緑地を設けることを義務化すること、④駐車場、ごみ処理施設、給水施設、公園などを確保すること、⑤起業者に環境資源、環境整備協力金の提供などの協力を義務づけること、⑥事業計画の提出は近隣関係者の同意が得られることを前提とすること、⑦「町づくり審議会」を設置し、町民が総合的な審議に参加できること、など徹底した乱開発防止条約となっている<sup>12)</sup>。この条例はリゾート法などの国の施策と全く対抗しているものであるといえよう。このように、由布院ブランドともいべき市場に便乗してきたリゾート開発などの現象は、

<sup>11)</sup> なお、この時点即ち1990年における大分県の平均地価の上昇率は5.9%であったのに対して、湯布院町においては商業地区で53%、山林で23%値上がりしたのである。前掲3)、371頁。

<sup>12)</sup> 高見乾司(1995)：『霧の湯布院から』。海鳥社、176～177頁。

非常に危機的な状況下におかれていたのである。しかし、やがて来るバブル経済崩壊とともに、事業の撤退や変更が相次ぐようになる。出来上がったマンションには、既に無人の状態も散見されるようになってきているという。

やがて、1991年に「湯布院町総合計画」が策定され、ここに新しい湯布院町の方向性が見直される。その後、1994年にやまなみハイウェイ「阿蘇～別府間」が無料化され、さらに1996年、大分自動車道が福岡～大分間が全通となり、ますます交通体系が整備されることになり、現在、別府を凌ぐ人気の一大観光地として君臨するに至るのである。

### Ⅲ. 由布院における芸術文化観光空間の形成

現在こそ、全国屈指の温泉観光地であり、かつアートの町としても知られるようになったが、由布院にアートの観光空間が形成されたのは比較的遅く、1970年代であるといわれている。

まず1975年に「ゆふいん音楽祭」、「牛食い絶叫大会」、続いて1976年に「湯布院映画祭」が相次いで開催され、湯布院という町が全国にその名を轟かせるきっかけになった。

「ゆふいん音楽祭」は、室内楽を中心とする地味な音楽祭として着実に歩みを進めてきた。近年では、出演者、演奏の質、聴き手や運営に関わるスタッフなどが、飛躍的な進歩をみせ、ますますレベルの高いものになってきているという。湯布院町には音楽ホールなどの施設はなく、公民館、ゴルフ場のクラブハウス、湖畔のレストラン、ホテルのロビー、さらには美術館やペンションなど、様々な会場を演奏者や観客、スタッフなどが巡ることになるというが、それがまた、この音楽祭の魅力の一つである<sup>13)</sup>。

また、「湯布院映画祭」は、「映画館一つない町。しかしそこに映画はある」というキャッチフレーズで始まった。昔は、外部からスタッフが乗り込んできてやっているから地域性がない、などという議論がされたこともあったというが、今やこの映画祭は日本の映画祭の代表格といえるまでになった。さらに若い実行委員の定着とともに、「こども映画祭」、「ゆふいん映画愛好会」などの地味な活動も生まれた<sup>14)</sup>。

このような優れたイベントは「町づくり運動」の先駆けとなったが、やはり「一年一度の祭」という性格が強かったため、音楽、映画などを核とする地域文化を形成するにはまだ及ばなかった。

1980年代に入ると、「湯布院民芸村」、「末田美術館」、「空想の森美術館」、「画廊・いちのつば」、「陶芸ギャラリー・もちまる」など、美術作品の展示を主体とした本格的

<sup>13)</sup> 前掲 12)、35 頁。

<sup>14)</sup> 湯布院映画祭は、毎年監督や脚本家、あるいは埋もれた名作などに焦点を当てる「特集」と、その年の新作を公開に先駆けて上映する「特別試写」、上映後に行われるシンポジウムなどによって構成されている。前掲 12)、39 頁。

な芸術文化観光施設のオープンが相次ぎ、「アートの町」が地域景観として明確に現れるようになる。また、1984年、湯布院町岳本の金鱗湖に近い場所に、現在の由布院美術館の前身である佐藤溪美術館が開館した。1918（大正7）年、広島県に生まれた佐藤溪は、全国を放浪し、詩や絵を描き続けた画家であるが、1959年に42歳の若さで没している。「芸術教」なる宗教の教祖を名乗った時期があったりこの画家の正体は不可解であるという。その遺作が30年もの年月を経て大量に由布院に残ったのは、家族が大切に保管していたこと、その後散逸の危機に直面したとき、由布院の町づくりのリーダー達を中心とする住民達が基金を作ってでも残そうという運動を展開したこと、その一連の動きの中で、佐藤溪の絵に惚れ込んだ高橋鳩子氏が救世主のごとく現れ、一括して買い取ったことがあげられる。そして、現在佐藤溪の作品を常設展示する「由布院美術館」の開館へと結びついたのである<sup>15)</sup>。

このころ音楽祭、映画祭が10年目を迎え、全国的な評価が高まる。観光客の数も飛躍的に増大した。また、80年代後半には、「アートフェスティバルゆふいん」が開催された。このイベントは、町に点在するアートの拠点が、それぞれ自主企画の展覧会に参加し、町を「ミュージアム」として見立てた美術展である。町中に展開されてきたアートの拠点を結ぶネットワークを完成することで、由布院という「地域」を単位とした美術展の開催が可能となり、音楽祭、映画祭などとも連携できれば、「アートの日常化」が達成されるのではないかという議論から提案されたものであった。そしてこれまで、美術館やギャラリーなど施設という枠組みの中で行われていた美術展が、地域という枠の中で自由に展開され、市民の日常生活の中にも「アート」が浸透していくことになったのである<sup>16)</sup>。これこそが由布院における芸術文化観光空間の原点と呼ぶにふさわしいものと思われる。

そして、1989年、「列車美術館」として注目を集めた「ゆふいんの森号」が走行を開始した。この列車の中には、「ゆふいんの森アートギャラリー」という特設コーナーがあり、大分市出身で地元にもなじみが深い建築家・磯崎新の展覧会をはじめ由布院の町と結んだ様々な企画展が開催される。これは新しい形の文化拠点として注目を集めた。また、1990年12月15日に磯崎新氏によるJR由布院駅が完成した。同時にオープニングの記念式典と合わせ「磯崎新展」が開催の幕を開けた。

この駅の特徴は、世界的な知名度を持つ設計者自身が、町民の議論の中に踏み込み、周辺の景観をめぐるデザイン論などに配慮したこと、美術館、音楽会、映画、演劇などに活用できるアートギャラリーを備えていること、改札口を取り払った広い吹き抜けの空間のあるコンコースなど、駅全体が「ミュージアム」のような機能を持つということなどがあげられる。これらの施設の運営は、町内に誕生した美術愛好グループによってなされ、い

---

<sup>15)</sup> 前掲12)、52～54頁。

<sup>16)</sup> 前掲12)、57頁。



よいよ本格的に「アートの町由布院」というイメージが定着してきたのである<sup>17)</sup>。これらの動きと呼応して開催された「わたくしの町美術館」（1991～1993年）は、美術館を地域あるいは町という単位で行うという視点など、従来の美の観念にはなかった視点を提示し、ますます由布院アートのイメージを大きく前進させる役割を果たした。この時点で、実質的に「町じゅうに展開するアート」という由布院の地域文化は定着したといえよう。

しかし、1991年から1994年初頭まで、由布院の町を襲った一連の大型リゾート開発に関する論議は、町を二分する政治的な対立にまで発展するほどに深刻化した。その過程で、由布院アートの運動に携わる人々も数々の発言をした。それは、良好な環境の中で、初めて質の高い地域文化が形成される、という共通認識に立つものであった。しかし、厳しい批判もあり、由布院の町が観光地として発展を遂げ、その中で文化活動やアートの位置付けも重要となり、活況を呈してきた反面、観光地で展開される芸術活動の中に、低俗なアートビジネスが混入してきているという指摘がされるようになってきた。さらに、「土地の開発や環境問題については厳しい批判をするが文化的環境破壊に対しては一言も発言がない。」、「由布院の町は墮落した。その墮落への道の手引きを由布院アートがしているのではないか。」、「由布院のアートや文化活動が活発な活動によって地域文化にいささかの貢献をしたことは認めるが、今や由布院の文化活動は終焉へと向かっている。なぜなら一定の評価に胡座をかき新しい施設の参入を排する風潮があるからである。」、「観光地における集客力に寄りかかる企画展、販売を主体とした美術施設の乱立などは、美術や美術館などの施設の本来のあり方とは逸脱している。」など、当時の由布院アートに対する批判は尽きなかった<sup>18)</sup>。

さらに大型開発問題に端を発した政治的な対立現象は、駅のホールの運営を巡って、由布院アート運動の面々と行政側の対立にまで波及し、混乱を極めた。そして、これらの問題などによって、「アートフェスティバルゆふいん」も5回をもって終結宣言をしたのであった。それでもなお、このようなカオス的狀況の中で、美術館・博物館などの有料入場施設10館、半公共的な展示スペース3ヶ所、画廊などのアート・スペース20ヶ所以上というように、由布院アートは増殖を続けてきた。広域に展開され始めた同様の美術展との連携など、「由布院の町づくり&アート運動」は、根強く発展してきたのである。このような動向は、芸術が「地域」という単位で捉えられた試みとして、非常に高く評価された。その後、各地に同様の方法による美術展が相次いで登場し始めたといわれており、この由布院の動向は現代の地域美術の動向に大きな影響を与えたといえる<sup>19)</sup>。

<sup>17)</sup> 由布院温泉観光協会の資料による。

<sup>18)</sup> 前掲12)、45～46頁。

<sup>19)</sup> その後、1994年「ゆふいんアートナウ94」という美術展が開催された。「列車美術館」として人気の高い「ゆふいんの森アートギャラリー」、列車と町内のアート・スペースを結んだ「ゆふいん駅ギャラリー」などを中心に、美術館や画廊、ホテル、ペンションなどに設けられた展示スペースなど、湯布院町に点在する30ヶ所の会場で展開された企画である。

このように、観光地域や観光施設、歴史的建造物、歴史的町並みなどが「ミュージアム」であるという視点で捉えなおされ、それらが住民共有の貴重な財産であるという認識が定着すれば、今後の地域文化や地域のアイデンティティーは無限の可能性を持ち続けると考える。湯布院におけるアートの運動はこれらの最たる形であろう。まさに環境までを包括した展示空間へと広げ、「環境アート」と呼ぶにふさわしい地域が形成されてきたのである。

#### IV. 由布院・湯の坪街道周辺における観光空間の構造と観光動態

由布院の観光集落において、その中心をなすのが湯の坪街道沿いの町並みである。ここでは、当該地区における観光空間の構造を把握すると共に、観光動態について実態調査の結果をもとに論述したい。

旧街道沿いの古い町並みと新しい民家や個性的な商家などが混在しつつも、絶妙な調和をみせる湯の坪街道沿いの町並みでは、地元住民が地酒を売る店の店頭に集い、町並みのデザインのことや、それぞれの店の品ぞろい、経営姿勢、景観や環境問題に至るまで、様々な議論が繰り広げられている。これを「湯の坪デザイン会議」という。業種構成は、酒屋、菓屋、民芸店、ギャラリー、パン屋など多種多様であるが、それぞれが個性的でありながら、何か集合体としての秩序が感じられるこの魅力的な町並みは、このように自由な会議の場から生まれているのである。

また、近年の「湯の坪街道ポケットパーク構想」によって町並み景観が非常に良く整備されている。この構想は、町並みの中に点々と残っている小さな空き地に木を植えて、そこにベンチを置いたり、芝を植えたりして公園にしよう、という計画である。これは「湯の坪デザイン会議」の人々の発案によるものである。日常的に住民達が交わしている町のデザイン論議が、商店の個性化を生み、町をより活性化させ、まさに「住んでよし、訪れてよし」の生活文化観光空間へと変化させてきた。ここには本来の意味での「町づくり思想」が定着しているといえよう。

現在この町並みには、先述したような美術館やミュージアム、ギャラリーといった芸術文化観光施設をはじめ、情緒ある共同浴場、お洒落なショップやカフェなどが混在し、格好の町歩き観光空間を形成している。今や由布院観光空間の顔ともいえる当該地区であるが、温泉観光地・由布院の中であって、最も温泉のイメージからかけ離れているところであるともいえよう。むしろ、「清里高原」や「軽井沢」などといった、女性に人気のトレンドスポットを連想させるのである。

ここで、観光地における空間構造を把握するために欠かせない要素である、宿泊施設の地域的分布特性についてみることにする。図 2 は、湯の坪街道周辺における宿泊施設（ホテル・旅館・民宿・ペンション）の分布を示したものである。これをみると、湯の坪街道西部、由布院美術館周辺に、地区の中では比較的大きなホテル・旅館が集中している。

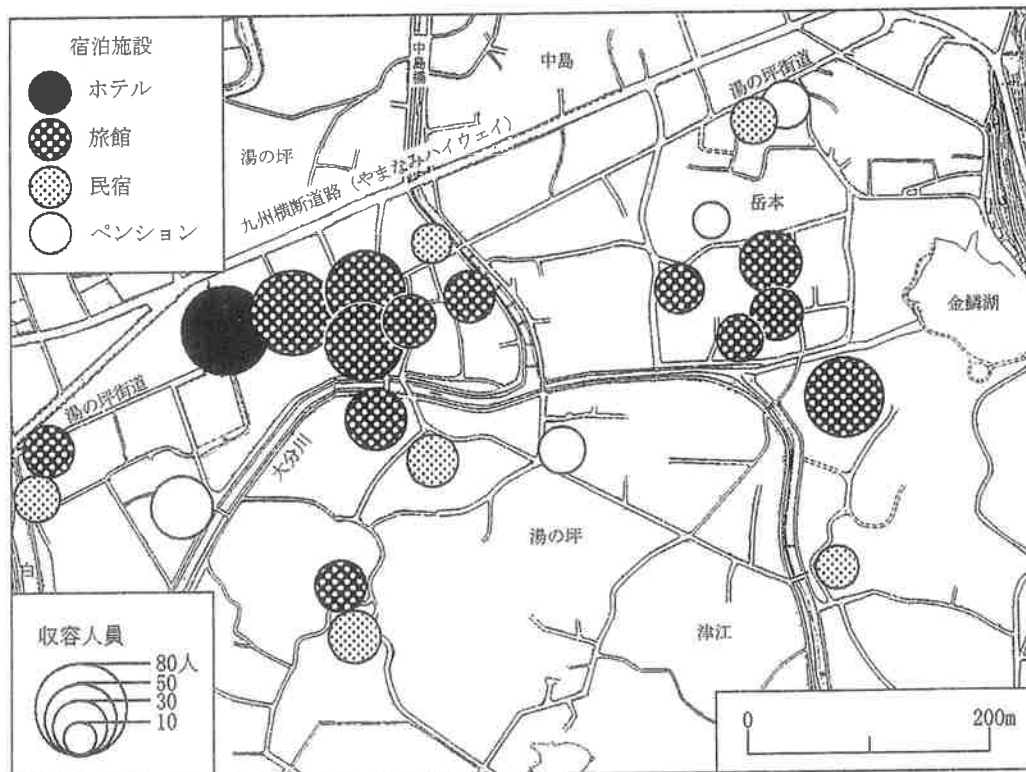


図2 由布院・湯の坪街道周辺における宿泊施設の分布（2000年）

（注）現地調査および由布院温泉観光協会の資料により作成。

しかし、最大でも収容人員80人程度と、全体的に宿泊施設は小規模である。また、金鱗湖周辺にも旅館の集中がみられる。さらに最近では、「お洒落」というイメージに拍車をかけるがごとく、小規模であるが綺麗なペンションの進出もみられる。そのような中で、長年事業を続けてきたような古めかしい民宿も混在しており、小規模ながら多彩な宿泊施設に恵まれているのである。

続いて、当該地区における観光関連施設の地域的分布特性についてみたい。図3は、この地区における観光施設の分布とそれぞれの開業年について地図化したものである。由布院駅から駅前通り、由布見通りを経て、湯の坪街道に入り、金鱗湖までの約1kmの町並みには、美術館、ギャラリー、ミュージアム、土産品店、雑貨店、温泉施設、カフェなど、多彩なショップが混在しながらひしめいている。それぞれの開業年をみると、平成以前からオープンしているところがまだ比較的多く残っているのがうかがえる。特に、湯の坪地区の由布院美術館周辺は、当該地区の中でも早期に町づくり事業が開かれたこともあり、割合早い時期にオープンしたところが集中している。一方、金鱗湖周辺をみると、比較的新しい店舗が集中しており、前者とは対称的である。特にここ5年くらいは、土産品店や雑貨店、アイスクリームショップなど様々な店の進退が相次ぎ、地域変化が著しい。さらに、来る21世紀に向けて、当該地区では大規模な開発が計画されており、約20軒ほどの新しい店舗の進出があるという。このように、今後も著しい地域変化が予想され、継続調査

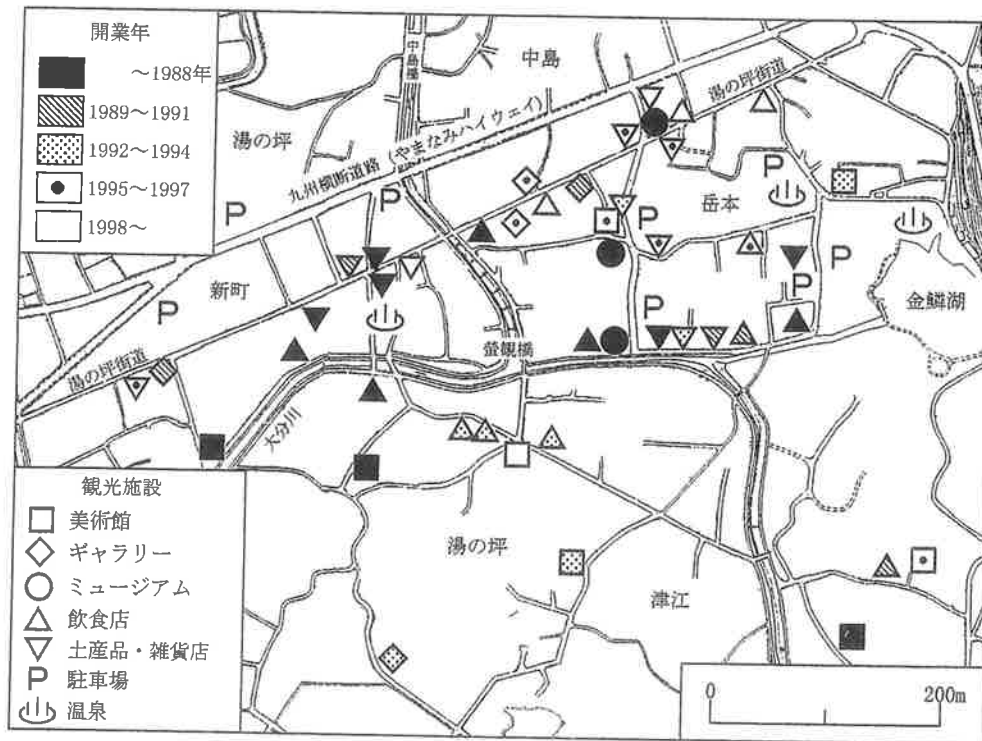


図3 由布院・湯の坪街道周辺における観光施設の分布と開業年(2000年)

(注) 現地調査および由布院温泉観光協会の資料により作成。

を欠かすことが出来ない。

また、やはり温泉観光地であるので共同浴場もあり、それぞれ町の景観デザインに配慮した情緒あるつくりになっている。一方、近年相次いで建てられたお洒落なカフェ、アイスクリーム屋、その他の飲食店、土産品店などは、町並みの至るところにみられ、町歩き観光客の目を楽しませたり、少し休憩する場所として欠かせないポイントになっている。何よりも、それぞれのお店の人の対応がとても良いと評判であり、これこそ「人とのコミュニケーションのしやすいふれあいの町」といわれる由布院を根底から支えている重要な要素であることが感じられるのである。「全国津々浦々の観光客がみな常連になるように」、というつもりで対応しているというあるカフェの人の言葉が印象に残っている。

続いて、観光客に対してアンケートによる実態調査を実施したので、これについて若干の考察を述べたい。なお、1日で実施した調査である故に、サンプル数70と少なく、観光客構成も宿泊客が45%、日帰り客が55%というように、今回の調査結果が必ずしも由布院の一般的観光動向を示すとは言い難いと思われるが、今後の継続研究の一部としたい。

まず、交通手段については、駅に近接していることもあり、「鉄道」が56%を占めている。そして、自家用車が40%であるが、通常はもう少し多いと思われる。自家用車の観光客が口を揃えていうことは「駐車場の不備」である。場所がないために随所で路上駐車のみられ、問題であろう。

続いて、当該地区の観光市場性を把握するために観光客の住所を聞くと、この日は大分県内（大分市・別府市・日田市など）が63%と大多数であったが、福岡県12%、熊本県10%など九州近県も多い。さらに、広島県、大阪府、東京都、埼玉県からの観光客もみられ、サンプル数からの確率からみてもやはり全国区の観光地であることが再認識できる。また、来訪回数についても、当然、県内・近県は3回・4回とリピーター率が高くなるが、広島や東京からの観光客もリピーターであり、ぜひ再訪したいという。やはり、この独特の観光空間には、遠隔地からも人を引きつける大きな魅力があることをうかがえる。

観光目的については、温泉観光地・由布院でありながら、この地区では「美術館巡り」や「お洒落な店でのショッピングや喫茶」、「お洒落な雰囲気を楽しむ（町歩き）」など、温泉保養以外の目的が60%と意外に多い。中には、由布院が温泉観光地であることを認識していない人もあり、温泉以外の、芸術文化観光空間としての由布院観光イメージの勢力が非常に大きくなっていることが察知されよう。

また、主な立ち寄り観光施設については、由布院駅および金鱗湖を除くと、由布院美術館、テディベアの森、九州湯布院民芸村、ガラスの森・オルゴールの森、九州自動車歴史館の順であり、その他小さなカフェやショップ、ギャラリーなどを含むと枚挙に暇がない。ただし、観光周遊ルートは、割合狭小な地域なのである程度はパターン化されており、半日くらいかけて一通りじっくりと巡る人が多い。あるいは、自家用車での観光客は少し離れたアート村や由布岳まで足を伸ばす人も多い。さらには、別府とセットで周遊するという人も少なくない。

最後に、当該地区の印象や問題点について聞いてみたところ、やはり「お洒落」、「上品」、「気品がある」など非常に好意的な声が多く聞かれた。しかし、目が肥えた観光客には、「あまりぱっとしない」、「思っていた程ではなかった」、「あまり個性がない」という人もいて、最近のやや一面的な観光開発をうかがわせる。

また、問題点として特に多かったのが、「自動車の往来が激しく、危険である」という意見である。確かに湯の坪街道は道幅が非常に狭く、その中を大勢の観光客と自動車が混在している景観は問題であろう。従って、多くの人々が「湯の坪街道の歩行者天国化」を望んでいる。これについて行政当局に問いかけてみたところ、実際、多くの観光客からこれまでに同様の指摘が相次いできたが、そこで生活を営んでいる住民にとっては当然規制行為であり、歩行者天国化されることでかなりの不便を強いられるため強い反対があり、結局施行できないということである。湯布院町当局は、常に「住んでよし、訪れて良いまちづくり」をモットーに実践してきた故に、この相克関係は今後性急に検討していかなければならない課題であろう。

また、初めて来た観光客が、どこをどう歩いていいのかわからず、町中に簡単なマップや案内板でもあれば、という指摘があった。由布院の当該地区もそうであるが、別府・鉄輪温泉や日田・豆田町など、町歩きが主体の観光地において、多くのビギナーはどのように回れば効率的であるかということに頭を悩ませているようである。確かに、全国区の観

光地としてはそのような配慮について未だ不十分な点があるように思われる。従って、幾つかの 패턴の観光周遊ルートを設定し、観光客向けのわかりやすい観光マップを随所で無料配布したり、道標や由来などが記述された案内板などを、町の要所要所に設置するなどの対策を今後検討されるべきであろう。

浦は<sup>20)</sup>、西欧における温泉リゾートでは、ビジターは町歩きをしながらウインドウショッピングで品定めを行うようなところが主流であることを述べ、日本でも見習うべきであることを指摘しているが、まさに由布院は、このような温泉保養リゾートとなりうる数少ない地域であると考ええる。

## V. むすび

このように、20世紀後半の湯布院町における、「ゆふいん音楽祭」、「湯布院映画祭」、「由布院アート」などから開花した文化活動は、町に活気を生みだし、新しい形の地域社会・文化を育んできたといえよう。そこには個性的かつ有能な人材が多数出現し、独創的なイベントや文化事業、芸術文化観光施設などが誕生したのである。それは全国区にまで波及し、地域はこうした状況の中から、失われつつあった「誇り」を取り戻したのである。即ち、芸術文化観光が、この由布院という地域の新時代を切り開く先駆けの役割を果たし続けてきたことは疑いない。また由布院では、「アート」という要素を美術館や画廊などといった「施設」から、「まち・地域・環境」という枠組み全体に展開していき、新しい概念を獲得しようとする試みが開始された。その結果、現代アートと由布院という町（地域・環境）とのコラボレーションによって日本でも稀有な観光空間が形成されてきた。また、温泉のみならずアートにおける「癒やし」の効用など、現在の平成不況下においては、まさに日本人の観光志向性や欲求に非常に適した観光空間であることは誰しもが認めることであろう。今後も、由布院の町を地図とカメラを片手にアートを巡るといった散策を、全国からの観光客が楽しめるような観光空間として持続されることを期待したい。

なお今回は、あえて温泉という要素については触れず、あくまで芸術文化観光空間としての由布院にアプローチし、実態調査も時間的制約上、湯の坪街道周辺に止まってしまったが、今後は由布院温泉地区全域、あるいは、伝統的湯治場である湯平温泉にまで手を広げていき、より様々な側面からの湯布院町という観光地域の構造や動向について明らかにしたいと考えている。

### 【付記】

本稿の作成にあたって、湯布院町役場総合政策局総合政策班の野上安一氏、近藤信氏には、御多忙の中貴重な御教示を賜りました。ここに、深甚なる感謝の意を表します。

---

<sup>20)</sup> 浦 達雄 (1999) : 世界の温泉リゾートの魅力。観光 402 (3) 、38～43 頁。